



## 坂 竹本土佐大夫

野澤 吉兵衛

十一月八日午後八時五十五分より全國中繼放送

同人 森下 辰之助

「夢が浮世か」の語り出しから土佐音丸出しの鼻へかゝつた大夫獨特の音聲が文樂座出勤時代より一層強く響いたが、相當高い調子ですかと語れて居つた「薄き烟のいとなみに」「夫の手だすけ」は殊に土佐音で耳にさばつた。「鳥の聲」以下菊の露の唄は思ふた程實感が出て居なかつた上に氣の變化に乏しかつた、「三味線出してよい機嫌ぢやの」以下お里と澤市のとりやひの詞は頗る平凡で期待を裏切られた。「どうでわれの氣に入らぬは無理ならねど」はモツと變つて欲しかつた「貧苦に迫れど何のその厭味なくよい語り口であつた「明の七ツの鐘を聞き」と「山路いとはす三とせ越し」共に頗るよかつた。「細き心も細からぬ」は無意味だつた。

「折りしも坂の下より」の語り口は變化が乏しかつた、「稱ふる詠歌も」の稱るが餘りに強く杖をついたので少々耳ざはりであつた、詠歌は高い處で一寸火が出そうだつたのは無理がないが、まづ／＼無事にやり了せた。「嬉しいぞよ女房共」は眞情が出て居つた。「杖を力に盲目のさぐり／＼

て」の「盲目のさぐり／＼」は氣分が出て居つたが、杖を力にが平凡だつたのは惜しかつた「かゝる事とは露知らず」は變化に乏しかつた「澤市サン澤市サン澤市サンのふ」は能く氣分が出て居つた「遙かなる以下」こゝにまより外天分えらそうだつたにがまづ無難「あとに残つて私しやマアどうせう」より「堪忍して下さい」は少しも息がぬけず面白く聞けた、「此世も見へぬ盲目の以下大落しまで寸分すぎなく結構。「南無阿彌陀佛彌陀佛」はテツ。

今此一段を開き了つて七十七の高齡で既に第一線を引退した。老人が一個所のぼろも出さずしつかりと語り了せた事は流石に斯道の長老である。殊に非常に感心した事は語りだしより終りに近くなる程、末廣がりにしつかりしてくる事は流石に其藝力の偉大さの然らしむる處で引退後相當の時日を経たる今日に到るまで、かく迄力演し得るゝ事は全く大夫が平素拙生を守り藝道に對する忠實な心がけの賜に外ならぬと深く感ぜしめられた。兎に角當代に於ける斯界の至寶として後世に傳ふべき偉大な放送記録と云はねばならぬ。

三味線は現役引退後もそう大夫程變化はない筈とは云へ、中々立派であつた。「誓は深き壺阪の御寺を」以下三重は殊に雄大な氣分が漲つて居つた。淨瑠璃無難の放送には蓋し三味線の力與つて大なるものあり近頃會心の放送であつた事を謝す。